

## 田んぼの水やり

千代田区立昌平幼稚園（東京都千代田区）

〔5歳児〕

本園の稲作体験は、新潟で農業指導者として活躍された地域の協力者の力をお借りして取り組んで来た。試行錯誤を繰り返しながらも今年で5年目になり、今年度の5歳児は入園したときから稲作に取り組む姿を見て育ち、自分たちが5歳児になって稲作に取り組むことを心待ちにしていた。

### 〔環境の工夫〕

- ・置き水を田んぼに近い所に置き、水遣りがスムーズに行えるようにする。
- ・毎日の活動となっていくよう幼児に声をかけ、保育者も一緒に行っていくようにする。

### 〔取り組みの様子〕

- ・「先生、田んぼの水はとっても温かいよ」と驚いたように自分の発見を伝えるA児の発言から、田んぼには汲み置きの水が良いことが共通理解される。
- ・B児は黙々とジョー口に水を汲んで少しずつ傾けながら田んぼに水を入れていく。
- ・C児は田んぼの中央まで水を流そうとするが稲にもかかってしまう。B児に「そっとあげるんだよ」と声をかけられ「だって、真ん中まで届かないんだもの」と答える。
- ・そのやり取りを聞いていたD児はしゃがんで水遣りをする。
- T：「なるほど、しゃがんでやると稲ちゃんに水がかからないね」とD児の気付きを認める。
- ・「こっちにも水が無い」とE児が反対側に水が無いことに気付き皆に伝え、反対側に行くとC児が水を遣る。
- T：「ありがとうCちゃん。そっちまで水が届く方法があるといいんだけどね」とつぶやく。
- ・突然F児が砂場の道具置き場に走って行き、雨どいを持って来て、それをつなげて田んぼに水を入れ始める。
- ・周りの幼児が「F児、そうやるといいね」と認める。そして、汲んで来た水を雨どいに流す。
- ・F児も嬉しそうに繰り返し水を汲んで来ては流す。
- ・翌朝から張り切って自分たちから田んぼへ行き、雨どいに水を流して水が真ん中まで流れ着くことを確かめている。
- ・F児が「先生ちょっと、こうやって持ってて」と雨どいを斜めにして使うことを思いつく。
- ・斜めにすると水の流れが変化することに気付く。
- ・「もっと高くしないとダメだ」とF児はレンガの台では低すぎると、テーブルや舟形遊具と連結させることを考える。
- ・“つなげる” “水を流す” “流れを見る”などに夢中になり、声を掛け合って繰り返し取り組んでいる。

### 〔評価〕

- ・砂場や水遊びなどで繰り返し楽しんできた経験を先行経験として、田んぼの水遣りに生かすことができた。
- ・自分たちの大事な稲にとってどのような水遣りがいいのか、少しずついろいろな方法が分かってきた。
- ・共通の目的に向かって友達とより良い方法を考えて取り組み、達成感や満足感を共有することができた。

### 〔学び〕

稲を倒さないような水のあげ方を工夫しようとする。

そっと  
しゃがんで  
少しずつ (知)

片側から水を入れていくと反対側に水がたまらないことを知る。 (知)

砂場で雨どいに水を流して遊んだ経験を生かして水遣りをする方法を考え、自ら準備し実践する。 (心・技)



斜面にすると水の流れが速くなるということに気付く。 (知・技)

繰り返し、試したり工夫したりする。 (心・技)

友達と目的を同じにして取組んだことの成果を共に、喜び合う。

### 〔今後の課題〕

稲の生長を楽しみにしながら、幼児が興味を継続させていく援助をする。



### みどころ

大切に育てている稲に対するやさしい眼差しや、知恵を絞って自然と向き合う姿から、「科学する心」が育まれていることがわかります。物の選び方、扱い方、活かし方など、子どもたちが遊びを通して獲得してきた知恵や技能を自分たちの生活の中で必要に応じて活かせることは、共に生きることを喜び心にもつながる貴重な体験です。そうした子どもの発想や取り組みを保育者が支えることによって、子どもならではの創意工夫が生まれています。